

# 新島先生と百足屋

朝倉 恭二



ろびます。その百足屋の梅につきままして詩を残されております。

庭上一寒梅

笑侵風雪開

不爭又不力

自占百花魁

一月二十三日午後二時二十一分、ついに先生は永眠されて天国へおいでになったのであります。天国へ行かれましても同志社を見守り、日本の教育を永久に心配されていることと存じます。百足屋へ先生を見舞いに見えた方々をあげてみますと、大隈伯爵、大磯に静養中の渋沢栄一氏、北垣京都府知事、なお教育者としての名声が日本に永久に残っておられるクラーク先生、伊藤博文公は小田原からかけつけておられます。このことを思いますと、日本中の人は先生のご病気を心配なさっていたというところは歴然としてわかります。

\*

次に百足屋のことについて申し述べたいと思います。百足屋は宮代謙吉氏の経営にかかっておりました。経営は主として番頭

新島先生の偉大な教育者、強烈なる人道主義者、強力な指導・実践者であられたことは同志社で十分研究なさって、大部な文献を残されておりますので、私などが喋々するまでもありません。ただ大磯に関することと百足屋にまつわることにつきまして回顧してみたいと存じます。

先生は明治二十二年十一月二十八日、前橋にて発病なさいました。百足屋愛松園においでになったのは、二十二年十二月二十八日であります。年が改まりまして一月二十日には危篤になられておられます。腹膜炎の併発により非常にお苦しみになったそ

うであります。二十一日には八重夫人と徳富蘇峰先生とをお呼びになりました。遺言十カ条を百足屋で口述して書かされたのであります。その遺言たるや、同志社を思い、教育を憂えたのみの遺言であります。一言の私事がないということは先生の偉大なることを偲ぶに十分だと思えます。百足屋においでになりました、はじめ大磯の宿に波の音を聞きてという短歌がざいいます。

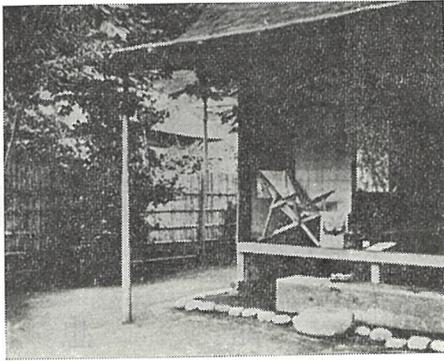
いにしえの人も夢間に聞きつらむ

磯にくどくる波の声こえ

先生の大磯の潮騒を耳にされてうたった短歌でございます。

大磯は暖かいために暮から梅はもうほこ

まかせてありました。宮代氏は大磯の五代目町長をやっておられます。明治二十八年五月から明治三十八年一月まで約十年間大磯の町長を勤めておられます。その間、明治三十一年頃には神奈川県々会議員もなされておられます。たいへん進歩的な実践者で、時代の先端を行った方です。小田原にありました神奈川県師範学校を鎌倉と大磯に設置しようという運動までなされた方です。



(百足屋愛松園)

百足屋は今ありませんが、旧東海道に面しまして、あそこから愛后神社の下まで続いておりました。間口は約七間、二階建て奥行き約三十間です。その間に別荘と称するものが五つありました。その一つが先生のお入りになった愛松園であります。百足屋は一般の旅館ではなくて、名士に限って泊っていたようであります。当時、実業之日本社社長だった益田義一さんの手紙が残っておりますが、最後に、「家族を当方へ避暑せしめおり候ため、昨日、ちよつと来寄いたし候。」とあり、これは百足屋で書かれた手紙であります。百足屋にはお子さんが二人おりました。その次男が私と同級でありまして、小さい時は屋敷に上り、また庭で遊んだことを思い出します。百足屋の庭は松竹梅が繁り、また池あり、石ありで、毎日職人は五人ずつ手入れをしておったとのことあります。

私の家は大火のあと明治三十六年に新築をいたしました。その時に百足屋さんから松竹梅三本をもらいました。今もって松の

みは小さな庭であります。朝な夕な私の目をたのしませております。

百足屋はしまいはヨウカク堂というコユルギ焼までなされて、大磯の土産として東京、横浜の避暑客に多く愛でられておりました。明治の終り、ついに競売に付せられました。栄華の夢あわく、まことに惜しいことではありますが、三菱が買いとりました。そのあと宮代喜代治さんが買いとりました。大磯キネマを建てたこともございます。

ご存知の通り、あの終焉の地の記念碑は昭和十六年十一月二十五日に除幕式が挙行されております。本日、改修竣工されました。まことに目出たいこととお祝辞を申し上げます。

以上申しあげて百足屋ならびに大磯のことに申し述べました。

(神奈川県大磯町立図書館長)

※本稿は、今年一月二十三日、大磯で行なわれた新島襄終焉の碑改修竣工式での祝辞です。